

しんぱん

しどうようもんしゅう

新版 指導要文集

だいいつしよう

しんじん

きほん

第一章 信心の基本

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

にちれん ほけきよう ちげ てんだい でんぎよう せんまん いちぶん オヨ
日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ
ことなけれども、難を忍び慈悲のすぐれたることはおそれ
をもいだきぬべし。
抱

(005) 開目抄 かいもくしょう

御本仏の大慈悲 72 ページー 13 行 ごほんぶつ だいじひ

日蓮の法華経の理解力は、天台大師、伝教大師に比べて、
千萬が一分にもおよびませんが、難を忍び慈悲の勝れている点で
は、天台、伝教も敬い、畏怖（恐れかしこまる）の心をも
つでありましょう。

いちねんさんぜん

し

もの

ほとけ

だいじひ

お

ごじ

一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字
の内にこの珠を裏み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。

(006 如來滅後五五百歲始觀心本尊抄

御本仏の大慈悲 146 ページー 16 行)

いちねんさんぜん

まつぱう ひと

たい

くおんがんじょ ごほんぶつ

一念三千をしらない末法の人びとに對して久遠元初の御本仏

にちれんだいしよういん

だいじひ お

みようほうごじ いちねんさんぜん たま

(日蓮大聖人)は大慈悲を起こし、妙法五字に一念三千の球を

どくいちほんもん

だいごほんぞん あらわ

のち よ ぶっぽう みじゅく

つつんだ獨一本門の大御本尊を顕して、後の世の仏法に未熟な
しゅじょう くび か
衆生の頸に懸けてくださつたのです。

にちれん　じ　ひ　こうだい　なんみょうほうれんげきよう　まんねん　ほかみらい
日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未來ま
でもながるべし。日本國の一切衆生の盲目をひらける
功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。

くどく　むけんじごく　みち　ほうおんしよう　いつさいしゅじょう　もうもく　開流

(010 報恩抄)

にちれん　じひ　ひろ　おお　ごほんぶつ　だいじひ
御本仏の大慈悲 261 ページー10行

にほん　くに　なんみょうほうれんげきよう　まつぼうまんねん
日蓮の慈悲が広く大きいならば、南無妙法蓮華経は末法万年

いじょう　みらいえいごう　ひろ　にほん　くに
以上、未來永劫に弘まつていくであります。日本の国にあらゆ

ひと　しゅうきょう　たい　もうもく　むち　ひら　ちから　むげん
る人びとの宗教に対する盲目(無知)を開く力があり、無間

じごく　みち　地獄への道をふさぐものなのです。

願わくは、我を損する國主等をば、最初にこれを導かん。我を扶くる弟子等をば、釈尊にこれを申さん。我を生める父母等には、いまだ死せざる已前にこの大善を進らせん。

(037 顕仏未來記)

御本仏の大慈悲 612 ページー3行

願わくは私を迫害した國主たちを最初に成仏への道へ導いてあげたいものです。日蓮を助ける弟子たちのことを釈尊(久遠元初の自受用報身如來)に報告しましょう。またこのような自分を

う
ふ ぼ
い
さ い こ う
ぶ つ ぼ う

生んでくれた父母には、生きているうちにこの最高の仏法をおすすめしたいものです。

いま にちれん

い

けんちょうごねんみずのとうしがつにじゅうはちにち
こうあんさんねんたいさいかのえたつじゅうにがつ

いま

今、日蓮は、去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今

にじゅうはちねん あいだ

弘安三年太歳庚辰十二月にいたるまで、二十八年が間、

たじ

みょうほうれんげきよう しちじごじ にほんこく

また他事なし。ただ妙法蓮華経の七字五字を日本国の

いつさいしゅじょう

くち

い

勵

一切衆生の口に入れんとはげむばかりなり。これ即ち、

はは

あかご

くち

にゅう

い

じひ

母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり

かんぎょうはちまんしよう

(050 諫曉八幡抄)

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

742 ページー3行

いつきいしゅじょう どういつく

にちれんいちにん く

一
切
衆
生
の
同
一
苦
は、
こ
と
ご
と
く
こ
れ
日
蓮
一
人
の
苦
な
り
も
う
と
申
す
べ
し。

(050 諫曉八幡抄)

かんぎょうはちまんしょう

御本仏の大慈悲 745 ページー9行

ごほんぶつ

だいじひ

ひと

う

くる

ぜんぶ

あらゆる人びとが受けているすべての苦しみは、全部、そのまま
にちれんひとり くる

日蓮一人の苦しみであります。

なんみょうほうれんげきょう

とな

たてまつ

にほんこく

いつさいしゅじょう

われ

南無妙法蓮華經と唱え

奉つて、日本國の一切衆生を我

じょうぶつ

成仏せしめんといふところの願、しかしながら

によがしやくしょがん

つい いんどう

こしん わごう

ねがい

「如我昔所願」なり。終に引導して己身と和合するを、

「今者已満足（今、已に満足しぬ）」と意得べきなり。

こんじやくいまんぞく

いま すで まんぞく

こころう

（095 御義口伝

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲 1003 ページー16行

いっさいしゅじょう

い

く
く
う

によらいいちにん

の苦なり

く

(095 御義口伝)

おんぎくでん

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

1056 ページー14行

ひと

しゅじゅ

くる

あらゆる人びとの種々のさまざますべての苦しみは、すべて

にちれん

ひとり
くる

日蓮ただ一人の苦しみでもあるのです。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る念は、
大慈悲の念なり

(095 御義口伝)

御本仏の大慈悲
1057 ページー13行

にちれん もち

もち

悪

敬

くにほろ

日蓮を用いぬるとも、あしくやまわば国亡ぶべし。いか
にいわんや、数百人ににくませ、二度まで流しぬ。この
国の亡びんこと疑いなかるべけれども、しばらく禁をな
して『国をたすけ給え』と日蓮がひかうればこそ、今まで
は安穩にありつれども、ほうに過ぐれば罰あたりぬるな
り。

(107種々御振舞御書)

しゅじゅおんふるまいごしょ

（107種々御振舞御書）

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲 1239 ページー14行

あ

うやま

まちが

あつか

かた

日蓮を用いたとしても、悪しく敬う（間違った扱い方をする）

にちれん もち

くに ほろ

うやま

すうひやくにん

ならばかならず國は亡びるでしょう。まして敬うどころか數百人

にく に ど るざい

くに ほろ

うたが

に憎ませ、二度まで流罪にしました。この國が滅びることは疑いが

かみがみ

と

くに たす たま

にちれん

ないけれども、しばらく神々を止めて國を助け給え、と日蓮がひか

いま

あんのん

どうり

えていたからこそ今まで安穩であつたけれども、道理にあわないこと

ど こ ばち あ

があまりにも度を越したから罰が当たつてしまつたのです。

よ^うよ^うにおわするに、御辺はその一分なり。心ざし人
にすぐれておわする上、わずかの身命をささうるもまた
御故なり。天もさだめてしろしめし、地もしらせ給いぬら
ん。

殿いかなる事にもあわせ給うならば、ひとえに日蓮が
いのちを天のたたせ給うなるべし。

(205 四条金吾殿御返事 (智人弘法の事)

御本仏の大慈悲 1562 ページー16行

い
去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に、安房国

ながさのこおり うち とうじょうのごう いま こおり

あわのくに てんしょうだいじん

み

長狭郡の内、東条郷、今は郡なり。天照太神の御

廚 うだいしようけ た はじ たま もほんだいに

くりや、右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや、

いま にほんだいいち

こおり うち せいかつようじ もう てら

今は日本第一なり。この郡の内、清澄寺と申す寺の

しょぶつぼう じぶつどう なんめん

うまのとき ほうもんもう

諸仏坊の持仏堂の南面にして、午時にこの法門申しはじ

いま にじゅうしちねん こうあんにねんたいさいいつちのとう

ほとけ

めて、今に二十七年、弘安二年太歳己卯なり。仏は

しじゅうよねん てんたいだいし さんじゅうよねん

でんぎょうだいし にじゅうよねん

四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に

しゅつせ ほんかい と たも

なか だいなんもう

出世の本懐を遂げ給う。その中の大難申すばかりなし。

さきざきき もう

先々に申すがごとし。余は二十七年なり。その間の大難

あいだ だいなん

は、各々かつしろしめせり。

(219 聖人御難事)

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

1618

ページー6行

さ
けんちようごねんしがつにじゅうはちにち
あわ
くに
ちばけん
ながさごおり
去る建長五年四月二十八日に、安房の国（千葉県）長狭郡のな

とうじょう

ごう

いま
こおり

かの東条の郷、今は郡となっていますが、そこには天照太神

いせじんぐう

みなもとのよりも

きふ

にほんだいに
しんりょう

（伊勢神宮）に源頼朝が寄付した日本第二の神領があり、い

にほんだいいち

こおり

せいちょうじ

てら

までは日本第一になっています。この郡のなかの清澄寺という寺

しょぶっぽう

ぼう
じぶつどう

ほとけ
あんち

どう

みなみがわ

しょうご

の諸仏坊という坊の持仏堂（仏を安置する堂）の南側で、正午

わたし

ほうもん

なんみようほうれんげきよう

と

ことし

に、私がこの法門（南無妙法蓮華経）を説きはじめてから、今年

にじゅうしちねんめ

こうあんにねん

しゃくそん

しじゅうすうねん

は二十七年目で、弘安二年となりました。釈尊は四十数年、

てんだいだいし さんじゅうすうねん でんぎょうだいし にじゅうすうねん のち

天台大師は三十数年、伝教大師は二十数年の後に、それぞれ

う もぐべき さいこう おし

生まれてきた目的（最高の教えをとくこと）をはたされました。そ

おお

なん

い

のあいだの大きな難は、それぞれに言いつくせないほどであります。

まえまえ

の

わたし

にじゅうしちねん

それは前々から述べてきたとおりです。私は二十七年のいま、生

もくでき

だいごほんぞん

おも

う

まれてきた目的（大御本尊をあらわすこと）をはたしたいと思いま

りっしゅう

おお

なん

う

す。立宗からこれまでのあいだにうけた大きな難は、あなたがたが

し

すでによく知つているとおりです。

にちれん
日蓮、しゅご 守護たるところの御本尊をしたため参らせ 候こと
も、しょう 劣 師子王におとるべからず。 經に云わく 「師子奮迅の
ちから
力」とは、これなり。

(225 經王殿御返事

きょうおうどのがへんじ
御本仏の大慈悲
1632
ごほんぶつ
だいじひ
ページー16行)

ほけきょう さんぜ しょぶつほっしん 杖 そういう

法華経は三世の諸仏發心のつえにて 候 ぞかし。ただし、

にちれん 杖 柱 侍 たも 陰 惠

日蓮をつえはしらともたのみ給うべし。けわしき山、あし

みち 杖 倒

き道、つえをつきぬればたおれず。殊に手をひかれぬれば

なんみようほうれんげきよう しで やま 引

まろぶことなし。南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえ

杖

はしらとなり給え。

柱 たま

(246 弥源太殿御返事

やげんたどのごへんじ

転

御本仏の大慈悲 1699 ページー4行

ごほんぶつ

だいじひ

ここに日蓮、願じて云わく「日蓮は全く誤りなし。たど
い僻事なりとも、日本國の一切の女人を扶けんと願ぜる
志はすべてがたかるべし。

(265) 千日尼御前御返事（眞実報恩経の事）
御本仏の大慈悲 1740 ページー 13 行

かしまいっ
かしまもの
かしまいんが
彼の島に行き付いてありしが、彼の島の者ども、因果のことわり
理をも弁えぬあらえびすなれば、あらくあたりしこと
は申すばかりなし。しかれども、一分も恨むる心なし。
もう

(271) 一谷入道御書

いちのさわのにゅうどうごしょ
いちぶんうらこころ
御本仏の大慈悲
ごほんぶつ
1758
だいじひ
ページー10行)

にちれん ちゅうごく みやこ もの

へんごく

しかるに、日蓮は中國・都の者にもあらず、辺國の
しょうぐんとう しそく

將軍等の子息にもあらず、遠國の者、民が子にて候いし

にほんこくしちひやくよねん いちにん

とな そうろう

とな そら

かば、日本国七百余年に一人もいまだ唱えまいらせ候わ

なんみょうほうれんげきよう とな そうろう

とな そら

ぬ南無妙法蓮華経と唱え候

なかおきのにゆうどうしようそく

(273 中興入道消息)

御本仏の大慈悲 1768 ページー1行

ごほんぶつ だいじひ

まこと むしこうじゅう けいやく じょうよしぐしよう ことわり
実に無始曠劫の契約、「常与師俱生」の理ならば、日蓮
こんどじょうぶつ きへん あいはな あくしゆ だざい
今度成仏せんに、貴辺あに相離れて悪趣に墮在したもう
べきや。

(278 最蓮房御返事)

1783 御本仏の大慈悲

ページー5行)

にちれん

せんぜ

だいなん

ほけきょう

さんぜ

ごりやく

おぼ

日蓮が三世の大難をもつて、法華経の三世の御利益を覺し

そうら

めされ候え。過去久遠劫より已來未來永劫まで、

みようほうれんげきょう
かこくおんごう
このかたみらいえいごう
こうるう

妙法蓮華経の三世の御利益尽くすべからず候なり。

(279 祈禱経送状

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲 1786 ページー2行)

にちれん

う

とき

いちにちかたとき

心

安

日蓮、生まれし時よりいまに一日片時もこころやすきこと
はなし。この法華経の題目を弘めんと思うばかりなり。

ほけきょう

だいもく

ひろ

おも

(324 上野殿御返事 (刀杖難の事)

御本仏の大慈悲 1892.ページー1行

にちれん

う

とき

げんざい

いちにち

あいだ

日蓮は生まれた時から現在にいたるまで、一日、しばしの間も

ほけきょう

だいもく

ひろ

心がやすまつたことはありません。ただこの法華経の題目を弘めようと思はばかりだったのです。

おも

こころ

まつぱう　い
かしよう　あなんとう　もんじゅ　みろくぼさつとう
やくおう　かんのんとう　だいじょうきょう
末法に入りなば、迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、
藥王・觀音等のゆずられしところの小乗經・大乗經
ならびに法華經は、文字はありとも衆生の病の薬とは
なるべからず。いわゆる、病は重し薬はあさし。その
とき　じょうぎょうぼさつしゅつけん　みようほうれんげきよう　ごじ　いちえんぶだい
時、上行菩薩出現して、妙法蓮華經の五字を一闇浮提
の一切衆生にさづくべし。

(359 高橋入道殿御返事

たかはしにゅうどうどのごへんじ
ごほんぶつ　だいじひ
御本仏の大慈悲 1955 ページー3行)

たみ
骨
碎
はくまい
ひと
ち
搾
とくどう
ふるさけを、
ふ
とく
ほとけ
ほけきょう
たま
にょにん
じょうぶつ
うたが
得道、
疑うべしや。

(378 妙法尼御返事

みようほうあまごへんじ
ごほんぶつ
だいじひ
1999 ページー13行)